

山町の行政が誇るべき成果といってよい。

**土地利用など** 地形図に現れた土地利用を見ると、昭和三十  
年に現れた変化 年も平成九年も全般的に見ると、大久保の勝

山御所ゴルフ場と松田チェリーゴルフクラブ小倉南の建設のほ  
かは大規模な土地利用変化や地形改変は見られない。

長川集落北側の台地に作られた畑地も土地利用としては変化  
していないことが分かる。水田地域も位置はあまり変化してい  
ない。ただし圃場整備の進行により、水路網や水田の配列等は  
大きく変化している。

小規模な変化は地形図にも現れる。松田新町北側の丘陵地は  
昭和三十年には森林に覆われていたが、現在は三島団地の集落  
へと変化した。小長田集落の北にあった畑地の一部には小長田  
団地が造られるといった変化もある。また上野付近にあった丘  
陵地は国道の整備とともに、工業用地に造成されている。

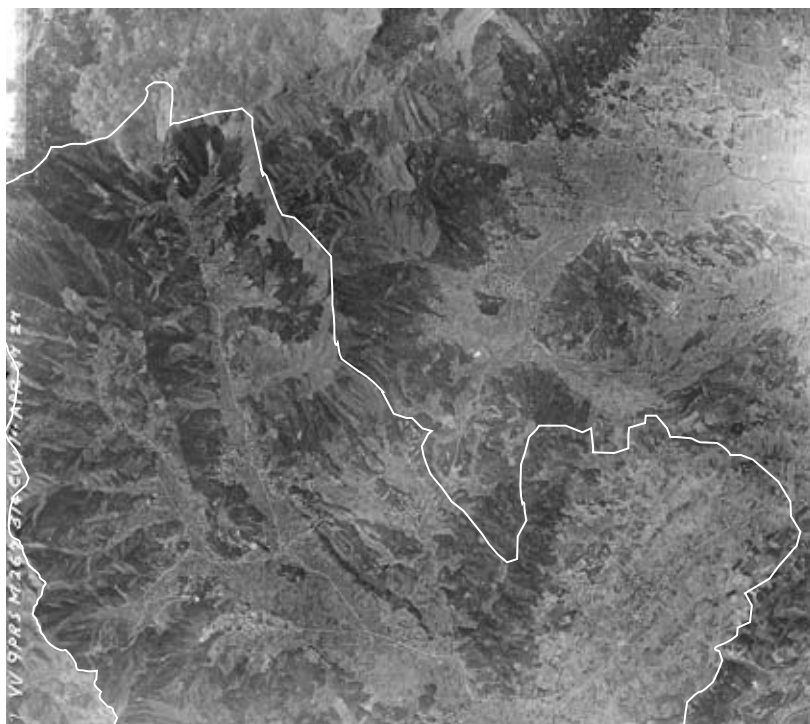
最大の変化は、道路網の整備である。昭和三十年当時の砂利  
道は舗装が進み、国道二〇一号線は、新仲哀隧道と黒田のバイ  
パス建設によってその通過位置と土地利用の性格を変化させ  
た。新しい国道二〇一号線沿いには飲食店などの商業施設が次  
第に形成されつつあり、都市化の兆しが認められる。道路網の  
変化では、県道荊田・採銅所線も味見隧道の新設と岩熊と池田  
の両集落のバイパス設置があり、これから変化する可能性が生  
じている。昭和三十年代までの筑豊地域への道は、自動車の通

行できた味見峠と仲哀隧道のほかにも峠道がいくつか残されて  
いた。しかし、浦河内から上採銅所へと延びる道や上野から七  
曲峠を経て鏡山へ向かう道、上矢山から平尾台へと向かう道な  
どの徒歩通行の道は現在失われている。

三村合併によって、岩熊にあった諫山村役場、上久保と新町  
の間にあった久保村役場、上黒田にあった黒田村役場は、上田  
の勝山町役場へと移転した。勝山町役場は、隣接する図書館・  
公民館総合施設のサン・グレートかつやまと共に町内の中心業  
務地区へと変貌した。近い将来の広域合併後にも、現在形成さ  
れつつある中心業務機能を地域の財産として今後にも有効活用し  
ていくことが望まれる。昭和三十年の合併前の旧三村に一枚ず  
つ設置されていた小学校は現在まで引き継がれており、これら  
は将来も地域の文化的なセンターとして引き継がれることが望  
ましい。

## 二 米軍撮影空中写真で見た勝山

勝山町付近を撮影した最も古い空中写真は、昭和二十二年  
(一九四七)四月十七日に米軍の撮影した縮尺約四万分の一航  
空写真である。写真1―5上は諫山村と黒田村を中心にしたこ  
のときの写真を示したものである。図では、森林や水が黒く写  
り、水田や畑地は中間的に写り、裸地は明るく写る。この写真  
を二枚並べているように見える写真1―6では、右目で右の写



上 勝山町北部（諫山村、黒田村周辺）



下 勝山町南部（久保村周辺）

写真1—5 終戦直後（昭和22年）の空撮（米軍撮影）  
（写真右上が町域）

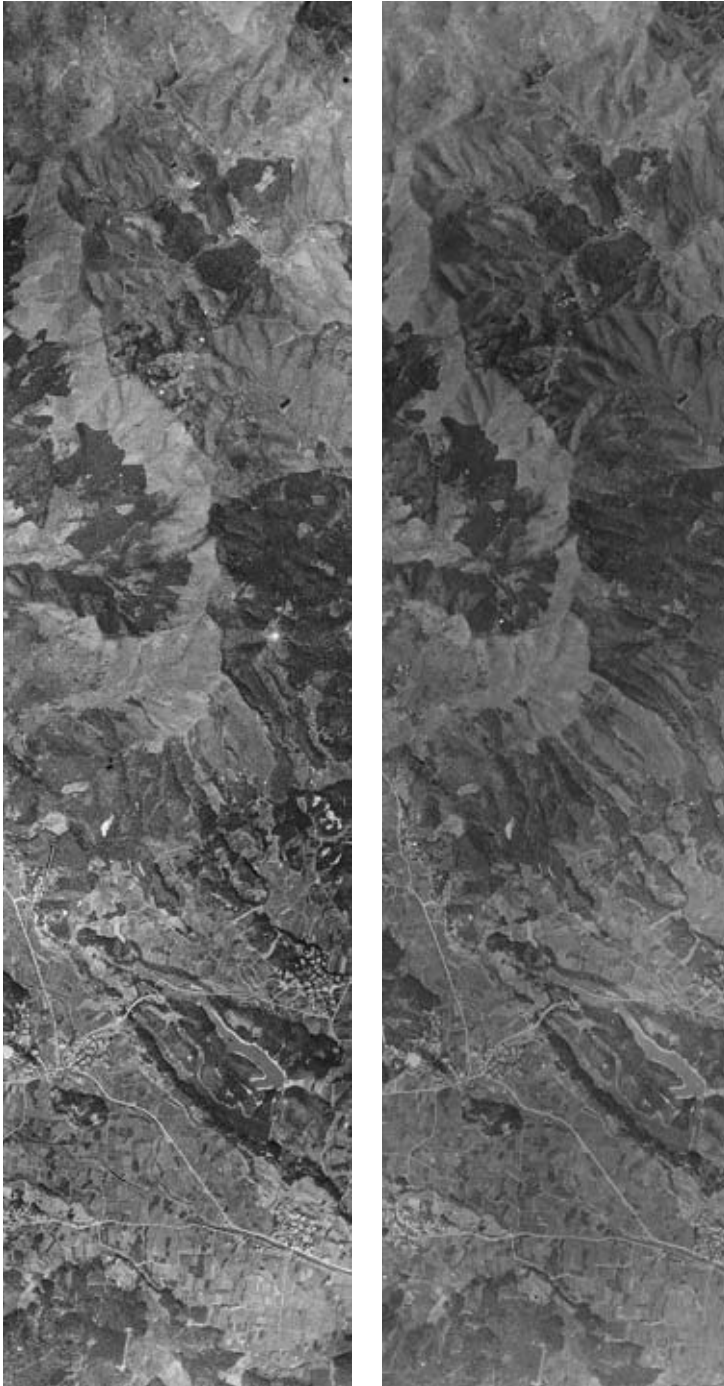


写真1—6 実体視可能な写真

真、左目で左の写真を見る方法で、立体的に見ることができ  
る。少し難しいが写真を水平に置き、左右の写真の間に手や紙  
を立てて左右の写真の同じ場所に指を置いて真上からのぞく  
と、次第に立体的な画像を見ることができ。これを実体視と  
いうが、これができるようになれば山や谷の起伏が鮮明に見  
え、家一軒一軒も鮮明に見えるようになる。

写真で見ると水田一枚一枚の方向などが分かり、圃場整備以  
前の様子を見ることができ。道路網や住居の分布などは太平  
洋戦争後間もなく写した写真であるが、現在のものと大局的  
にはよく似ている。写真1—5上右手下の黒田付近は北東方向に  
細長い水田や集落の列が認められ、低位段丘と阿蘇四火碎流か  
ら構成される黒田の台地が北東方向に流れる小谷によって浅く

削られていることが見て取れる。また、黒田では現在の国道沿いには全く集落がなかったことが分かる。写真1―5上中央やや下付近にある池田集落の周辺では細長い丘陵が南東方向に伸び、丘陵の間の谷を堰き止めた加廊戸池や長迫池が明瞭に見える。長川から宮原方向に広がる長峡川右岸の水田は南北方向に細長い配列をしており、これは圃場整備以前から似た方向に配列していたことが分かる。なお写真1―5下は、勝山町の南西部の久保村周辺を示している。

空中写真で見ると、六〇年以上前の景観についてある程度直接的なイメージを復元することができる。勝山町は丘陵を人為的に削剥するなどの土地改変が比較的少ないまま今日に至っていることも確認できる。上矢山の北側に広がるカルスト台地の平尾台は、写真1―5上では自然なドリーネなどのカルスト地形を残していたことが分かるが、現在は石灰岩の採掘によってこの地域のカルスト地形は失われてしまった。地形などの自然環境をほぼそのまま生かし続けてきた勝山町の景観を将来に残し活用することは、町民にとっても豊かな財産になるものと思われる。

### 三 衛星画像で見た勝山

#### 衛星画像の画像判読

勝山町のように町単位、あるいは市単位などの広範囲の現況や過去の様子を

知りたいとき、主に空中写真を用いることが多かった。しかし、昭和四十七年（一九七二）に打ち上げられた世界最初の本格的な地球観測衛星であるアメリカのランドサット（LANDSAT）の登場で、空中写真の場合よりも飛躍的に広範囲を対象とした観測が可能となった。この地球観測衛星によって、太陽エネルギーを受けた地上すべての物体が反射、または放射をしている電磁波を観測し、それを数値化して、地上に送られてきたものが衛星データである。通常、人間の肉眼でとらえている情報、いわゆる可視情報は、可視光線域と言われる〇・四〜〇・七 $\mu\text{m}$ （マイクロメートル）の波長帯の情報であり、これは電磁波の中のごくわずかな部分である。紫外線（一〇nm（ナノメートル）〜〇・四 $\mu\text{m}$ ）や赤外線（〇・七 $\mu\text{m}$ 〜一・〇 $\mu\text{m}$ ）などの波長帯の情報は、肉眼では確認することができない不可視情報である。しかし、さまざまな観測や調査を詳細に行うには、これらの肉眼では確認できない情報を目に見える可視情報に変換する必要がある。この場合、リモートセンシングという技術を用いる。

リモートセンシングは、対象物に直接触れることなく、離れた場所から物体の特性を調べることが可能な技術で、航空機や地球観測衛星にセンサーという観測装置を取り付けて物体を観測する。地球観測衛星を用いたりリモートセンシングを衛星リモートセンシング、地上で観測機器を用いて行うものを地上リ